

平成 18 年度「岩手・生と死を考える会」活動報告

中村一基* 千田 浩**

(2007 年 1 月 30 日受理)

(1) 中村代表あいさつ

今回の報告は、17 年度と 18 年度の 2 年度にわたっての活動報告となっている。本会の活動は、17 年度以降、〈例会〉と〈研究会〉を二つの柱にして行われてきたが、「活動の状況」をご覧になってわかっただけだと思うが、次第に〈研究会〉への比重が重くなってきた。それは、「生と死の教育プログラム」作成を目指した研究会であった。そのことは、会の活動方針として次第に自覚的になってきた方向性に基づいていた。平成 18 年 5 月に、これまでの〈例会〉の活動を『岩手・生と死を考える会〈例会〉記録集 I』(私家版)としてまとめたのも、千田君の「資料が散逸する可能性がある」という危惧に基づく強い勧めに同意したことにもよったが、〈例会〉としての一区切りをつけておきたいという気持ちの現れでもあった。そして、本年度末の「生と死の教育プログラム」完成を目指した。その内容に関して「平成 18 年度岩手県教職員 10 年経験者研修」で、中村が担当した講座「生と死から学ぶいのちの教育」に参加した小・中・高の先生たちから貴重なご意見をいただけたことはラッキーであった。

(2) 「岩手・生と死を考える会」の活動について

本「岩手・生と死を考える会」は、「生と死を考える全国協議会」の活動目標である「死への準備教育・ホスピス運動・死別体験者のわかちあいの場づくり」という 3 つの目標を意識しながらも、設立時の場の設定として、「(1) 教育現場における

『生と死の教育』『死への準備教育』についての学習の場とする。(2) 生涯学習の一環としての上記の教育について、総合的に学ぶ場とする。(3) 『総合演習』(大学での演習・中村担当)の発展の形も取る。」と定めており、最終的には岩手の教育現場に根ざした「生と死の教育」プログラムの開発作成を目指している。この点が、本会の最大の特徴である。

代表を務める中村も、「岩手県教職員 10 年経験者研修」《現代的な教育の諸問題》での講座「生と死から学ぶいのちの教育」を担当しており、平成 18 年度で第 3 回を数える。本研修は、岩手県教育委員会主催の研修の一環であり、このような形で、教員が「生と死の教育」を学ぶ機会がある県も全国的には珍しいと考える。《現代的な教育の諸問題》は、昨年までは、《総合的な学習の時間》であった。

また、本会の阿部が担当する「生と死の教育プログラム」作成も、順調に指導案検討を行っており、18 年度末には、最初のプログラム冊子が完成する予定である。例会に関しては、平成 18 年 2 月で 50 回を数え、平成 18 年 5 月に私家版として「平成 17 年度『岩手・生と死を考える会』記録集 1」をまとめることができた。

(3) 活動の状況

平成 17 年度

第 1 回 (2005/ 4/ 2・通算 32 回) 例会「IBC 特集を見て」(担当:野田)

- 第2回(2005/ 4/16・通算 33回)研究会『生と死の教育プログラム』作成・研究の方向性について(担当:阿部)
- 第3回(2005/ 5/ 7・通算 34回)例会「命の値段」(担当:中村)
- 第4回(2005/ 5/14・通算 35回)研究会「授業・命の値段」(担当:阿部)
- 第5回(2005/ 6/ 4・通算 36回)例会「〈あの世〉という他界観」(担当:中村)
- 第6回(2005/ 6/11・通算 37回)例会「ホームページ検討」(担当:鈴木)
- 第7回(2005/ 6/18・通算 38回)研究会「永訣の朝」(担当:千田)
- 第8回(2005/ 7/ 9・通算 39回)例会「優生思想、優生学について」(担当:阿部)
- 第9回(2005/ 7/16・通算 40回)研究会「教材に見る死生観」(担当:千田)
- 第10回(2005/ 8/ 2・通算 41回)夏期セミナー(13:00～17:00)、懇親会「命について考える授業実践報告」(担当:鈴木泰)懇親会会場:「ますます」(TEL .019-622-6006)
- 第11回(2005/ 9/10・通算 42回)例会「ヒロシマ報告」(担当:伊藤)
- 第12回(2005/ 9/17・通算 43回)研究会『生と死の教育プログラム』作成・研究推進計画(私案)「出生前診断」(担当:阿部)
- 第13回(2005/10/ 8・通算 44回)研究会「性別と人権(性的マイノリティの存在を通して考える)」(担当:阿部)
- 第14回(2005/10/15・通算 45回)例会「障害児教育」(担当:佐々木)、研究会「男女の産み分け」(担当:阿部)
- 第15回(2005/11/12・通算 46回)研究会「生と死の教育の構造図」(担当:千田)
- 第16回(2005/11/19・通算 47回)研究会「現代人の伝記」(担当:千田)
- 第17回(2005/12/17・通算 48回)例会「21世紀高野山医療フォーラム報告」(担当:阿部)、研究会「教員10年研修の内容」(担当:中村)

忘年会(2005/12/28)

- 第18回(2006/ 1/28・通算 49回)例会「命の授業—教育と医療の連携—(宮城県立拓桃医療療育センター主任医長地域・家庭支援部長田中総一郎先生の講演会から」(担当:阿部)、研究会「未来のいのち」(担当:千田)
- 第19回(2006/ 2/18・通算 50回)例会「沖縄報告」(担当:伊藤)、研究会「水俣病について」(担当:阿部)
- 第20回(2006/ 3/11・通算 51回)、研究会「大人になれない子どもたち」(担当:千田)
- 第21回(2006/ 3/25・通算 52回)「資料整理・記録集作成に向けて(1)」

平成18年度

- 第1回(2006/ 4/ 8・通算 53回)「資料整理・記録集作成に向けて(2)」
- 第2回(2006/ 4/15・通算 54回)「資料整理・記録集作成に向けて(3)」懇親会
- 第3回(2006/ 5/13・通算 55回)例会「日本文学に描かれた死、そして死後の世界—『日本霊異記』の〈蘇り〉譚—」(担当:中村)、研究会「なぜ、ホームレス?」(担当:阿部)懇親会
- 第4回(2006/ 5/20・通算 56回)研究会『生と死の教育』への国語科的アプローチの可能性(担当:千田)懇親会
- 第5回(2006/ 6/10・通算 57回)例会「活動報告」(担当:千田)、研究会「EQ(感性指数)を高めよう!」(担当:阿部)
- 第6回(2006/ 6/24・通算 58回)例会『memento mori 岩手 2006』報告(担当:千田)
- 第7回(2006/ 7/ 8・通算 59回)研究会「学校教育における『死』」(担当:庭瀬)、「指導案検討」(担当:阿部)
- 第8回(2006/ 7/15・通算 60回)例会「日本的他界観・死生観と〈死への準備教育〉をめぐって—或る院生との対話—」(担当:中村)、研究会「県国研報告」(担当:千田)
- 第9回(2006/ 8/11・通算 61回)【夏期セミナー】例会『『日本の他界観と死への準備教育』メモ』

- (担当：中村)、研究会「いのちの教育実践のための研修会報告」(担当：中村・庭瀬)、「雨月物語」(担当：千田)、懇親会
- 第 10 回 (2006/ 9/30・通算 62 回) 例会「生と死を考える全国協議会参加報告」(担当：鈴木)、研究会「東京・生と死を考える会 第 5 回夏季セミナー報告レポート」(担当：庭瀬)
- 第 11 回 (2006/10/ 7・通算 63 回) 研究会「指導案検討会 (1)」(担当：阿部)
- 第 12 回 (2006/10/14・通算 64 回) 研究会「指導案検討会 (2)」(担当：阿部)、懇親会
- 第 13 回 (2006/11/23・通算 65 回) 勤労感謝の日 研究会「指導案検討会 (3)」(担当：阿部)
- 第 14 回 (2006/12/ 2・通算 66 回) 例会「今、地方大学の公開講座が面白い」(担当：千田)、懇親会
- 第 15 回 (2007/ 1/13・通算 67 回) 例会「教職員研修 10 年研の反省」(担当：中村)
- 第 16 回 (2007/ 1/27・通算 68 回) 研究会「卒業研究ダイジェスト」(担当：鈴木)

上記のような活動を継続している。今年度の活動の重点事項は、記録集の作成であった。

① 平成 18 年 5 月には、私家版として「平成 17 年度『岩手・生と死を考える会』記録集 1」を作成することができた。

代表の中村教授から「はじめに」として、次のように会の活動をまとめていただいた。

「平成 15 年 10 月に会を設立して、月 2 回ぐらいのペースで例会を行ってきましたが、正確に、何回、例会を行ったのか、代表である私も把握していませんでした。そのような事態のなかで、事務局長をお願いしている千田君から、〈例会〉資料の散逸も考えられるので、平成 18 年 3 月までを、一応、一括りにして整理してみてもどうか、という提案がありました。その提案を、会としても了承、これまでの例会資料を整理してみました。それによって、本当に、いろいろな話題で、例会を行ってきたことがあらためてわかりました。雑

多とも言える資料の集積ですが、会としては重要な活動の記録の一端であります。今後も、いろいろなテーマで例会を行っていきと思いますが、まずは『私家版』という形で資料をまとめておこうと思います。現在、岩手・生と死を考える会では、例会とは別に、『生と死を考える教育プログラム』の研究会を始めています。平成 18 年度は、会としては、この研究会にも力を入れていきたいと思っています。この研究会は会員のなかの教師を中心の研究会ですが、試行錯誤しながらも、具体的な指導案のモデルの検討も行っています。模索の日々です。研究成果は例会の資料集とは違った形でまとめていきたいと思っています。(2006・3・31)」

活動の状況を見てもらうと分かるように、平成 18 年度の前半は、資料集作成のための記録整理の作業を行った。資料には、書き込みがあったり、すべてが揃わなかったり、といろいろな不備や問題点があると思うが、形として残すことを重視し、製本には大学の機材を使わせていただいた。重ねて感謝したい。ありがとうございました。

② 千田個人としては、高校の国語の教師の立場で、高等学校教育研究会国語部会春季大会で研究発表を依頼されたので、『『生と死の教育』への国語科的アプローチの可能性』と題して、会の活動を含めて研究発表を行った。その前段階として、本会でもレジメを提示し、検討していただいた。国語部会春季大会は、平成 18 年 6 月 26 日 (月) に、岩手県立盛岡農業高等学校を会場として実施され、無事発表を終えることができた。研究発表の時間設定が、13:30～14:40 であり、2 本の研究発表で、それぞれの説明が 20 分という指定であったので、参会者の方々からの意見が 3～4 名ほどしか聞くことができず、また機会があればと考えている。ただし、助言者であった伊保内高校の校長の藤原正義先生からは、「今までこのような研究を国語科としてしたことがなかったのが不思議である」という好意的な講評をいただいたので、今後更に考えを深めて行きたいと思う。

③ 全国大会への参加。当会は、「生と死を考える全国協議会」に所属する団体である。当然、全国の動向にも関心を持ちつつ独自の活動を進めている。代表を初めとして、積極的に全国大会に参加し、研鑽を深めている。今年度も、「東京・生と死を考える会」主催の「いのちの教育実践のための研修会」へ中村先生、阿部会員、庭瀬会員の3名が参加、「生と死を考える会全国協議会全国大会函館大会」へ鈴木会員が参加し、全国の組織との交流を深めるとともに、研修を積んでいる。

平成14年度「東京・生と死を考える会」主催「第1回命の教育実践のための研修会」(中村参加)

平成15年度「東京・生と死を考える会」主催「第2回命の教育実践のための研修会」(中村・千田参加)

上越教育大学いのちの教育を考える会主催平成15年度第4回「いのちの教育」実践のための研修講座(千田参加)

「生と死を考える会全国協議会」代表者会議(2004年3月13日〔土〕・14日〔日〕於：英知大学)(中村・千田参加)

平成16年度「東京・生と死を考える会」主催「第3回命の教育実践のための研修会」(千田参加)

日本ホスピスケア・在宅ケア研究会第12回福島大会(2004年9月11日・12日)

子どもといのちの教育研究会(2005年2月26日)(千田参加)

平成17年度「東京・生と死を考える会」主催「第4回命の教育実践のための研修会」(中村・阿部・鈴木・千田参加)

第8回読書コミュニティフォーラム全国大会、大会テーマ「子どものいのちと未来を考える」(2005年8月19日〔金〕～〔土〕福島県文化センター)(千田参加)

「21世紀高野山医療フォーラム」(中村・阿部参加)

「生と死を考える会全国協議会」全国大会・テーマ「すべての教育の基礎にいのちの教育を」(2005年12月2日〔金〕～4日〔日〕千葉県柏市・麗澤大学)(千田参加)

平成18年度「東京・生と死を考える会」主催「第5回命の教育実践のための研修会」・テーマ「子どもにいのちの大切さを伝えたい」(中村・阿部・庭瀬参加)

2006年度「生と死を考える会全国協議会会津大会」〔2006年9月9日(土)～10日(日)〕(鈴木参加)

千田個人としては、1年のうちに東京・生と死を考える会の研修会と全国協議会の他に、何か1つ大会に参加できればよいのではないかと考えている。「日本死の臨床研究会」にも日程と経費の都合がつけば是非参加したいと考えている。

④ 若い学生たちが積極的に活動してくれた。教育学部4年生の鈴木仁司君は、会のホームページを担当してくれた。全国協議会函館大会にも電車を乗り継いで参加してくれ、会で報告もしてくれた。絵本『100万回生きたねこ』に思い入れが強く、卒業研究でも絵本を取り入れた研究してくれた。1月の例会でも発表を担当してくれる予定である。

大学院教育研究科1年の庭瀬望さんも昨年から例会の記録を担当してくれた。また、「東京・生と死を考える会」主催の「第5回命の教育実践のための研修会」にも意欲的に参加してくれ、例会でも報告してくれた。修士論文でも「生と死の教育」を扱う予定と聞いているので、その報告が楽しみである。

第3回(2006/5/13・通算55回)

例会報告

「日本文学に描かれた死、そして死後の世界—『日本霊異記』の〈蘇り〉譚—」(担当：中村)

※ 僧の景戒と死の認識? 『日本霊異記』の蘇生譚。

※ 僧景戒の夢—自らの身体を、自らの「魂神(たましい)」が焼く夢。夢の意味? —「長命」「官位」を得るか? 「景戒伝燈住位を得たり」(吉夢)。

怪異現象—「災の相先づ兼ねて表れて、

後に其の災の災来むということ。「災を免るる由を知らずして、其の災を受く。」
霊肉二元論。

- ※ 仏教伝来以前。死ねば死の世界という認識。その死の世界は山中・海上というこの世に存在した。祖霊信仰(他界はくこの世)にある)。神話の黄泉→生きながら「ヨモツヒラサカ」を通して往還可能だった。古代日本の連続的他界観。死者の「ヨモツヘガイ」のタブー。黄泉帰りの可能性。
- ※ 「仏教は本来、諸行を無常なもの捉え、不変な実体の存在を認めない。死亡した肉体から遊離して存在し続けるといった靈魂の存在を否定する。つまり、死後の世界は無いのである。」(今成元昭「日本文学における死後の世界—古代・中世の一—」)
- ※ 仏教が断絶的他界観を持ち込む。その断絶性の根拠として〈業・審判の思想〉と〈輪廻転生・因果応報の理〉がある。死後の世界は存在する。閻羅王の冥府。
- ※ ただ、『日本霊異記』の場合、仏教以前の連続的な他界観と融合した形になっている。〈蘇生〉が主要なテーマとして成立しうる。
- ※ 〈蘇り〉の根拠?→死ぬべきときではない。死ぬはずではない。罪よりも功德のほうが大きい。→閻羅王の裁き(『日本霊異記』)。魂は〈冥界〉を遍歴し、この世に戻ってくる。—蘇生。そして、冥府・地獄の様相を語る〈語り部〉の役割を担う。仏教の浸透。
- ※ 『日本霊異記』の〈地獄〉は黄泉の性格も有する。→地獄での「ヨモツヘガイ」のタブー。地獄から蘇りの鍵を、「ヨモツヘガイ」にあるとする不自然さ⇒「善悪の業報はヨモツヘモノによって左右されるものではないから、ここにも、日本古来の黄泉国観念に業報思想をからませ

て仏教の浸透を計ろうとしている沙彌たちの姿が浮かび上がってくる」(今成元昭「日本文学における死後の世界—古代・中世の一—」)

- ※ 神話的には〈蘇生〉(生の一回性)、民俗的には〈再生〉(人間としての生の無限性)、仏教的には〈転生〉(生の多様な形態での連続性)が死を捉えるポイントとなる。
- ※ 蘇生譚が成立するためには、肉体が存在しなければならない。放置された肉体は腐敗していく。どの状態までを、〈肉体〉と認識するか?〈肉体〉と認識できなくなったとき、魂の遊離を認める。そこまでは、蘇生を祈り、魂を鎮める。それが、〈殯〉の場面の意味。死を確定するために、〈殯〉がある。〈殯〉の期間は生と死の狭間の期間。
- ※ 死は転生。六道(地獄・餓鬼・修羅・畜生・人間・天)への転生。六道は苦しみの世界。大半の人間は罪業を背負って生きている。六道から逃れられるのは稀である。極楽はどこにあるのか?往生は、極楽(浄土)での誕生。六道からの離脱。『日本霊異記』では描かれることはない。冥府のなかの「金(こがね)の楼閣(たかどの)」が行基の転生する宮殿として紹介される程度である。冥府(冥界)は六道でもなければ、極楽でもない。それらの世界にいたる緩衝地帯である。
- ※ 「日本人にとって他界に関して二者択一が問題になるのは、黄泉か地獄の選択ではなく、末法思想や因果の思想を背景に、六道輪廻を続けるか、それとも真剣に極楽往生を願うかの選択を突き付けられた場合である。」(久野昭『日本人の他界観』)

第 14 回 (2006/12/ 2・通算 66 回)

例会報告「今、地方大学の公開講座が面白い」

(担当: 千田)

【長野大学】

小高康正（こたか・やすまさ）

1950年、東京都豊島区生まれ。関西大学大学院文学研究科博士課程修了（文学修士）。現在長野大学産業社会学部教授。専攻は近代ドイツ文学。主な論文に、『『アンネの日記』とホロコースト』（『戦後50年大戦とその記憶』、郷土出版社、1998）、「グリム童話の社会史」（『グローバル時代の地域と文化』、郷土出版社、1999）ほか。研究ノート『『グリム童話集』注釈の試み（1）～（5）』（『長野大学紀要』、1995年～1997）。訳書にシュタインバッハ／トゥヘル編『ナチスへの抵抗 1933～1945』（共訳、現代書館、1986）などがある。長野大学産業社会学部編

『いま、生と死を考える—豊かないのちを育む地域』郷土出版社、2002年

七、デス・エデュケーション—死への準備教育（小高康正）

（一）デス・エデュケーションとは何か。なぜ必要か。

デス・エデュケーション（Death Education）

各国の例

大学におけるデス・エデュケーション

- ① 上智大学 アルフォンス・デーケン氏（哲学）「死の哲学」（一般教養、講義）
- ② 東京外国語大学 鈴木康明（心理学・カウンセリング）「死の教育」（一般教養、講義）
- ③ 東洋英和女学院 平山正実（医師）「死生学」（一般教養、講義）

（二）長野大学「基礎ゼミナール」でのデス・エデュケーションの例

基礎ゼミの授業目標

一年間にやる主なこと

学生の文章の紹介

（1）課題作文「自分の命があと半年だったら」

（2）前期レポート「死についてのインタビュー」について

（3）後期レポートについて

（三）生涯教育としてのデス・エデュケーション

中年期以後のデス・エデュケーション

【金沢大学】

村井淳志（むらい・あつし）

金沢大学教育学部教授

1958年生まれ。東京都立大学人文学部卒、同大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学。東京都立大学助手、金沢大学助教授を経て、2003年から現職。専門分野は教育学。著書に『学力から意味へ』、『歴史認識と授業改革』、『「いのち」を食べる私たち』などがある。

細見博志 編著者

『生と死を考える —「死生学入門」金沢大学講義集—』北國新聞社 2004年

第3章 死生観と社会／第3節 個性的に生きる 自分探しの旅に出かけよう（村井淳志）

講義では、黒澤明監督・橋本忍脚本『生きる』を解説しながら、「個性的に生きるにはどうすればよいか」を話した。『生きる』のメインテーマは、「『夢を持ち、その夢の実現に向かって日々努力している人間』以外は死人同然だ。ではどうやったら夢＝やりたいことが見つかるのか？→「自分探しのマニュアル」

- 1 自分って、いったいどんな人間だろう
- 2 心を動かされた時にだけ見える自分
- 3 マイナス方向の体験から学ぶ
- 4 感動する本に出会うために
- 5 映画は感動に出会うための宝の山
- 6 言葉を使わない文化に対して

7 「旅」は文字通り自分発見のチャンス

学生たちのコメント

死生観を中心とする公開講座が、現在いくつかの大学で開催されていて、多くの受講者を集めている。長野大学では、2000 年度総合科目「いま、生と死を考える」は社会人 119 名、学生 167 名の受講者であった。金沢大学では、総合科目「生と死を見つめて—死生学入門」で 150 名収容の教室に 425 名の受講生が殺到した。学生や一般市民の関心は、死を扱った問題に対して大きい。この需要に今後大学はどのように応えていくのか？

【奈良大学】

大町 公（おおまち・いさお）

1949 年京都生まれ。京都大学文学部卒業。同大学院文学研究科博士課程修了。倫理学専攻。現在、奈良大学教授。著書に『善の本質と諸相』（共著、昭和堂）、『受け容れる、老いと死と悲しみと』（法律文化社）、論文に「オルテガにおける『少数者』をめぐって」（「奈良大学紀要」第 19 号）などがある。

大町公 『私の「死への準備教育」』法律文化社、1997 年
まえがき

-
- 3 長野大学産業社会学部編『いま、生と死を考える—豊かないのちを育む地域』郷土出版社、2001 年、p. 1
 - 4 細見博志 編著者『生と死を考える —「死生学入門」金沢大学講義集—』北國新聞社、2004 年、p.252

第 1 章 Death Education とは何か—A・デーケンの「死への準備教育」

第 2 章 死を見つめる心—岸本英夫のたたかい
宗教学者岸本英夫（1903?1964）『死を見つめる心？ガンとたたかった十年間』（講談社文庫、1973 年）毎日出版文化賞受賞 生命飢餓状態

第 3 章 心に残る闘病記
—西川喜作『輝やけ我が命の日々よ』

千葉敦子『「死への準備」日記』

原崎百子『わが涙よわが歌となれ』

第 4 章 この世をどう生きるか—上田三四五「たまものとしての四十代」
くるしみの身の洞^{うら}いでてやすらへと神の言葉もきこゆべくなりぬ（『鎮守』）

第 5 章 「ガン告知」の現在
1993 年 10 月、季羽俊文子『ガン告知以後』（岩波新書、1993 年）告知は前提

第 6 章 「死に備えなさい」—日野原重明のサナトロジー

我が国のデス・エデュケーションの普及について、最も精力的に活躍している人アルフォンス・デーケン（神父・哲学者）、日野原重明（医者・プロテスタント信者）

第 7 章 悲しみは超えられるか
ノーベル賞作家パール・バック『母よ嘆くなかれ』 知的障害を持った娘

参考文献

あとがきにかえて—死の恐怖について

絶版の書籍

平山正実、A・デーケン編『身近な死の経験に学ぶ』春秋社、1986 年

樋口和彦、平山正実編『生と死の教育？デス・エデュケーションのすすめ—』創元社、1985 年

長尾宇迦『業句の海 小説・俳人下山逸蒼』読売新聞社、1997 年

島田雅彦『中学生の教科書？死を想え』四谷ラウンド、1999 年

【北海道教育大学函館校】

佐々木 馨（ささき・かおる）

1946 年、秋田県生まれ。1975 年、北海道大学大学院文学研究科博士課程中退。専攻、日本中世仏教史。現在、北海道教育大学教授。文学博士。著書に『日蓮と「立正安国論」』

(評論社)、『中世国家の宗教構造』『中世仏教と鎌倉幕府』(共に吉川弘文館)、『アイヌと「日本」—民族と宗教の北方史』(山川出版社)などがある。

佐々木馨

『生と死の日本思想—現在の死生観と中世仏教の思想—』トランスビュー、2002年

プロローグ

第Ⅰ部 現代日本人の宗教意識

第一章 日本は宗教の博物館

第二章 多重信仰の実態

第三章 天皇と神道、仏教と葬式

第四章 なぜ「無信仰の信仰」か

第Ⅱ部 現代人の死の見方

第一章 臨死体験

第二章 新しい死

第三章 脳死・臓器移植をどう考えるか

第四章 文学と哲学をとおして→倉田百三『出家とその弟子』、森一郎「哲学にとって死はどこまで問題か」(『東京女子大学紀要論集』第49巻第1号所収、1998年)

第五章 キューブラー・ロスと葉っぱのフレディ

第六章 救済としての「あの世」

第七章 現代人の死のイメージと来世観

第Ⅲ部 中世新仏教の死生観

第一章 なぜ中世か

第二章 地獄と極楽

第三章 鎌倉新仏教の思想空間

第四章 宗祖たちの死生観

第五章 死生観の転換

エピローグ

註

あとがき

また新規参加者の不足等課題は多い。しかし、阿部会員の意欲的な指導案作成の結果、今年度末には、念願の「岩手・生と死を考える会教育プログラム集」が完成する予定である。完成のあかつきには、全国の生と死を考える会においても検討していただきたいと考える。

今後とも「生と死を考える会全国協議会」等の動向も視野に入れつつも、岩手独自の活動を模索しながら本会の運営を展開していくことを目指している。

「平成17年度『岩手・生と死を考える会』記録集1」(平成18年5月完成)

プログラム検討→「岩手・生と死を考える会教育プログラム集」の発行(平成19年3月発行予定)

(4) 今後の方向性

2003年に設立した本会は、上記のような活動を継続している。ただし、例会への参加者の固定化、